

神認識と人間的行為

－アキナスの「聖なる教え」について－

佐々木 亘

The Cognition of God and Human Actions
－ Sacred Doctrine in Thomas Aquinas －

Wataru Sasaki

トマス・アキナスは、主著である『神学大全』の冒頭、第一部第一問題で「聖なる教え」について論じている。聖なる教えでは、被造物に関して、神を根源ないし目的として、神へと関係づけられるかぎりにおいて扱われている。その第二部は、神を目的とするところの、人間の神への運動が問われている。じっさい、神が人間の至福であるから、神が存在すると認識することは、人間にとって自然本性的な仕方では植え付けられているのである。人間による「人間であるかぎりの人間に固有な行為」、「人間がその主であるところの行為」、「考量された意志から発出する行為」が、「そこに永遠なる至福が存するところの、神の完全な認識へと秩序づけられ」ているか否かが、聖なる教えとして問題にされている。その限りにおいて、人間的行為は単純に時間的な行為と呼ぶことができない。神認識と人間的行為は、このような多元的な場で交差するのではないだろうか。一つ一つの人間の行為が、まさに永遠への運動となるのである。

Key Words: [アキナス] [聖なる教え] [神認識] [人間的行為] [至福]

(Received September 24, 2021)

序. 『神学大全』と聖なる教え

トマス・アキナスは、主著である『神学大全』の冒頭、第一部第一問題で「聖なる教え (sacra doctrina) について、それはいかなるものであり、いかなる範囲にまでおよぶか」を論じている。アキナスは『神学大全』で論じられることがらを聖なる教えとして位置づけるのである。この点、稲垣良典は次のように言っている。

聖なる教えはたしかに神感にもとづく学であり、神の知という上位の知・学に依存する学である。しかし、この学を探究する人間理性は、あくまで人間理性として探究を遂行するので

* 鹿児島純心女子短期大学生活学科生活学専攻現代ビジネスコース (〒890-8525 鹿児島市唐湊4丁目22番1号)

あり、神感あるいは啓示を視野に入れない人々の理性と、理性であるかぎりいささかも異なるところはない。聖なる教えは知恵と真理の探究であるかぎり、神の啓示を前提にしない他の諸々の探求と、探求としては同列であり、いわば同じレースを走る仲間であり、ライバルなのである⁽¹⁾。

聖なる教えはその対象が神、あるいは神の知であり、その対象の神聖性から「聖なる」と言われる。そして、「神感あるいは啓示を視野に」入れた学にはほかならない。神からの啓示を前提にして、神について論じる学が聖なる教えである。しかし、人間が営む「学」として捉えるならば、人間の理性による探求以外の何ものでもない。したがって、「神の啓示を前提にしない他の諸々の探求と、探求としては同列」である。神学としての聖なる教えは、その対象に関してはほかの学問に対して上位に位置づけられるとしても、人間の理性による探求であるかぎり、経済学のような社会科学や生物学のような自然科学と同列なのである。

では、かかる聖なる教えの探求の中で、人間、特にその倫理的ことがらに関する考察はどのように展開されるのであろうか。アキナスは、「聖なる教えは一つの学であるか」を論じているその第三項の異論解答で、次のように言っている。

聖なる教えは神と被造物に関して等しい仕方では論じているのではない。神については根源的な仕方であるが、被造物に関しては、神を「根源 (principium)」ないし「目的 (finis)」として、神へと関係づけられるかぎりにおいてである。それゆえ、学の一性は妨げられない⁽²⁾。

聖なる教えは神についての探求である。その中で、神から発出された被造物も論じられるが、その論証の仕方は神と被造物とでは異なっており、「神については根源的な仕方」で探求される。すなわち、人間にとって神がその根源であるところのものとして論じられる。これに対して、「被造物に関しては、神を根源ないし目的として、神へと関係づけられるかぎりにおいて」論じられる。人間が聖なる教えとして被造物を探求するのは、根源であり目的である神へと秩序づけられるものとしてである。しかし、後者も神について論じていることには変わりないから、「学の一性は妨げられない」ことになる。

かくして被造物である人間は「神へと関係づけられるかぎり」、聖なる教えの対象となる。では、かかる神への秩序づけの中で、人間の倫理的行為はどのように捉えられるのであろうか。本稿では神認識との関係からこの点を探っていく。

I. 神への関係づけ

まず、この第一問題で、人間の倫理的なことがらはどのように論じられているのであろうか。アキナスはその第四項で「聖なる教えは実践的な学であるか」を扱っており、主文では次のように言っている。

それゆえ、哲学的諸学においては、思弁的な学と実践的な学は別々であるが、しかし聖なる

教えは、自らのうちに両者を包含している。それはちょうど、同一の知によって、神がご自身とその為すところを認識するようにである。しかし、聖なる教えは、実践的というよりは、むしろ思弁的である。というのは、より根源的には「人間的行為 (actio humana : actus humanus)」よりも神的なことがらについて論じるからであり、人間的行為に関しては、それらの行為によって人間が、そこに永遠なる「至福 (beatitudo)」が存するところの、神の完全な認識へと秩序づけられるかぎりにおいてである⁽³⁾。

人間にとって、「哲学的諸学においては、思弁的な学と実践的な学は別々である」のは、知性ないし理性という認識能力と、意志ないし自由意思という欲求能力が、人間においては秩序として区別されるからである。そして、認識しないものを欲求することはできないから、欲求に認識は先立つ。しかるに、神は「同一の知によって、自身とその為すところを認識する」ゆえに、神においてはこのような区別は存在しない。そのため、聖なる教えは思弁的な学と実践的な学の両方を含むことになる。

そうではあるが、「聖なる教えは、実践的というよりは、むしろ思弁的である」。この場合の「思弁的」とは、思弁的な学と実践的な学が区別されるという次元での「思弁的」ではなく、両者を包含したうえでの「思弁的」と言えよう⁽⁴⁾。というのは、聖なる教えが「神の知という上位の知・学に依存する学」であるかぎり、「より根源的には」実践的な学がかかわるところの「人間的行為よりも神的なことがらについて論じる」からである。

では、「神的なことがらについて論じる」とは、具体的にどのようなことを意味しているのであろうか。アキナスは、『神学大全』第一部では、聖なる教えに関する第一問題に続いて第二問題では「神について、神は存在するか」が問われている。アキナスは、その序で次のように言っている。

この聖なる教えの根源的な意図は、神に関する認識を伝えることであり、それは、先に述べられたことから明らかなように、単にご自身においてあるかぎりだけではなく、諸事物の、特に理性的被造物の根源であり、その目的であるかぎりの、神に関する認識を伝えることである。それ故、この教えの開示を目指して、我々は、第一に神について、第二に理性的被造物の神への「運動 (motus)」について、第三に、人間である限り、我々にとって神へと向かう「道 (via)」である、キリストについて論ずることになるであろう⁽⁵⁾。

聖なる教えは神からの啓示を前提にして、「より根源的には」、**「神的なことがらについて論じる」学**である。したがって、その「根源的な意図は、神に関する認識を伝えること」となる。さらに、聖なる教えが論じられるのは、「神については根源的な仕方」と、「被造物に関しては、神を根源ないし目的として、神へと関係づけられるかぎりにおいて」に分けられるから、前者が「単にご自身においてあるかぎり」における「神に関する認識」であり、後者が「諸事物の、特に理性的被造物の根源であり、その目的であるかぎりの、神に関する認識」として解される。「神的なことがらについて論じる」とは、「神に関する認識を伝えること」を目的とした議論と言えよう。

そして、かかる「神に関する認識」の区別にもとづいて、『神学大全』は三つの部分に分かたれる。すなわち、「神について」の第一部、「理性的被造物の神への運動について」の第二部、「人間である限り、我々にとって神へと向かう道である、キリストについて」についての第三部である。この区別に関して、山田晶は次のように言っている。

『神学大全』第一部において、天使、物体、人間、等について論じられるが、それは、これらのものがすべて神を「根原」とするかぎりにおいてであり、第二部において、人間の倫理について論じられるが、それは人生の究極の目的が神であるかぎりにおいてであり、第三部において、キリストについて論じられるが、それはキリストが人間を究極目的に導く道だからである⁽⁶⁾。

『神学大全』の第一部は「神について」論じられるが、そこでは、「単にご自身においてあるかぎり」での神について（第一問題～第四三問題）と、「諸事物の、特に理性的被造物の根源」であるかぎりでの神について（第四四問題以降）に分けられる。第二部では、「理性的被造物の神への運動」が、「人生の究極の目的が神であるかぎりにおいて」、すなわち「理性的被造物の目的としての神」に関する認識として論じられる。第三部では、「人間である限り、我々にとって神へと向かう道である、キリストについて」、すなわち、「人間を究極目的に導く道」であるところの、人間としてのキリストが、人間の運動の実現に関する神の認識として論じられるのである。かくして、『神学大全』における人間に関する考察は、「神を根源ないし目的として、神へと関係づけられる」かぎりにおけるものであり、その意味での神に関する認識を伝えるものなのである。

Ⅱ. 人間的行為の意味

『神学大全』において、人間は、「神を根原とするかぎりにおいて」は第一部で、「人生の究極の目的が神であるかぎりにおいて」は第二部で論じられている。後者が「理性的被造物の神への運動」であるが、アキナスはその冒頭の第二—一部第一問題で、人間の「究極目的(ultimus finis)」について論じており、その第一項主文で次のように言っている。

人間によって為される行為の中で、人間であるかぎりの人間に固有な行為だけが、本来の意味で人間的と言われる。しかるに、人間が他の非理性的被造物から異なっているのは、「自らのはたらきの主 (suorum actuum dominus)」であるという点においてである。したがって、人間がその「主」であるところの行為が、本来、「人間的」と呼ばれる。さらに、人間は、「理性 (ratio)」と「意志 (voluntas)」によって自らのはたらきの主であるから、「自由意思 (liberum arbitrium)」はまた、意志と理性の機能であると言われている。それゆえ、「本来の意味で人間的と言われる行為」は、「考量された意志から発出する行為」である。これに対して、何かほかの行為が人間に適合するならば、たしかに「人間の行為」と言われ得るが、人間であるかぎりの人間の行為ではないので、本来、「人間的行為」ではない⁽⁷⁾。

第二部における考察の対象になる人間的行為とは、「人間であるかぎりの人間に固有な行為」であり、「人間がその主であるところの行為」にほかならない。人間が自らの主権のもとに為す行為が人間的行為である。それは、「考量された意志から発出する行為」、すなわち、理性によって考量され、「意志と理性の機能である」ところの「自由意思」によって選択された行為である。これ以外の行為、たとえば人間が無意識に行った行為や不可抗力による行為は人間的行為ではない。理性と意志が充分機能していない状況での行為も、人間的行為とは言えない場合がある。

かかる人間的行為について、そして、「主 (dominus)」の意味について、筆者は別の書物で書いているので⁽⁸⁾、ここでは繰り返さない。「人間的行為に関しては、それらの行為によって人間が、そこに永遠なる至福が存するところの、神の完全な認識へと秩序づけられるかぎりにおいてである」という場合、「目的である神に関する認識」が問われるのであり、神を目的とするところの「理性的被造物の神への運動」が問われるのである。

さて、この第二部での考察には二つの要素が区別され得るように思われる。一つは、「理性的被造物の」、「その目的であるかぎりの、神に関する認識を伝える」という点であり、もう一つは、「理性的被造物の神への運動」という点である。もちろん、「理性的被造物の神への運動」という仕方で「神に関する認識」が問われるわけであるから、または、本来、神を目的とする仕方で人間の運動が成立するのであるから、二つのことではなく、一つと言うこともできるかもしれない。

事柄としては、たしかにその通りであろう。しかし、人間にとっては厳密に区別されるのではないだろうか。なぜなら、「理性的被造物の神への運動」は、人間が自らのほたらきの主として行う行為であるが、人間は目に見える世界では時間的存在であるから、この運動はあくまで時間的でなければならない。これに対して、「目的としての神」は、永遠的存在であるから、かかる認識も、本来、永遠的であると考えられる。

神の全能性、全知、予定と人間の自由がどのように両立するかは、きわめて大きな問題で、ここで扱うことはできないが、少なくとも人間の倫理性が問われるのは、自然と超自然、時間と永遠が交差する場であると言いうことができるのかもしれない。

Ⅲ. 神の完全な認識への秩序

では、「人間的行為に関しては、それらの行為によって人間が、そこに永遠なる至福が存するところの、神の完全な認識へと秩序づけられるかぎりにおいてである」ということは、そもそもどのようなことを意味しているのだろうか。アキナスは先の第一部第二問題の第一項で、「神が存在することは自明であるか」を論じている。その第一異論では、次のような主張が展開されている。

我々にとって自然本性的な仕方で内在していることがらに関する認識は、我々にとって自明であると言われるのであり、それは第一原理について明らかである。しかるに、ダマスケヌスはその書の初めで言うように、神が実在しているという認識は自然本性的な仕方で我々に植え付けられている。それゆえ、神が存在することは自明である⁽⁹⁾。

第一原理は、思弁的理性のはたらしそのものを成立させるところの、論証そのものを可能にする原理である。それは、「我々にとって自然本性的な仕方で内在していることがら」であるから、自明である⁽¹⁰⁾。そして、この異論では「神が実在しているという認識は自然本性的な仕方で我々に植え付けられている」というダマスケヌスの主張にもとづいて、「神が存在することは自明である」と結論づけている。

第一原理が自明であることは明らかである。問題は、「神が実在しているという認識」が我々にとって自然本性的であるかという点であろう。この異論に、アキナスは次のように答えている。

それゆえ、第一について言わなければならない。神が存在すると認識することは、神が人間の至福であるかぎりにおいて、何らかの一般的な、ある混雑した仕方で、我々にとって自然本性的な仕方で植え付けられている。なぜなら、人間は自然本性的な仕方で至福を欲求しており、人間によって自然本性的な仕方で欲求されるものは、人間によって自然本性的な仕方で認識されるからである。しかし、これは神が存在することを端的な仕方で認識しているわけではない。それはちょうど、来る人を認識することが、ペトロが来ているにもかかわらず、ペトロを認識することではないようにである。じっさい、多くの人間が至福である人間の完全な善を富であると思っているし、ある人々は快樂と、ある人々は何かほかのものと思っているのである⁽¹¹⁾。

アキナスは、「神が存在すると認識することは、神が人間の至福であるかぎりにおいて、何らかの一般的な、ある混雑した仕方で、我々にとって自然本性的な仕方で植え付けられている」と言っ、「神が実在しているという認識は自然本性的な仕方で我々に植え付けられている」というダマスケヌスの主張を肯定している。この場合の「神が存在するという認識」は、「神が人間の至福であるかぎりにおいて」という限定のもとに成立している。

すなわち、「人間は自然本性的な仕方で至福を欲求して」いるが、「神が人間の至福」であり、「人間によって自然本性的な仕方で欲求されるものは、人間によって自然本性的な仕方で認識されるから」、言い換えると、かかる欲求が成立するためには、欲求の対象が何らかの仕方で認識されていなければならないから、かかる限定において、「神が存在するという認識」は、「我々にとって自然本性的な仕方で植え付けられている」。

このようにアキナスは、人間が「自然本性的な仕方で至福を欲求」するという点から、神の存在を我々は自然本性的に認識すると言っている。人間が至福を欲求するかぎり、欲求対象である神は何らかの仕方で知られていなければならない。問題はその認識の在り方である。いかなる人間でも、かかる認識は「自然本性的な仕方で植え付けられている」が、それは「何らかの一般的な、ある混雑した仕方で」であって、「端的な仕方で」ではない。アキナスはその説明として、「来る人を認識することが、ペトロが来ているにもかかわらず、ペトロを認識することではないように」という例を挙げている。たしかに、時間的がたてば、あるいは望遠鏡などを利用すれば、やってくる人物がペトロであると認識できるかもしれない。しかし、遠くから眺めているかぎり、「誰かが来る」とはわかって、その人物まで認識できないのである。

そこから、アキナスは「多くの人間が至福である人間の完全な善を富であると思っているし、ある人々は快樂と、ある人々は何かほかのものと思っている」と言っている。「自然本性的な仕方まで至福を欲求して」という点ではすべての人間が共通している。しかし、「神が人間の至福である」ということは、残念ながら人間にとって自然本性的な認識であっても、「端的な認識」ではない。至福を求めていることは明確で万人に共通しているとしても、「何が至福であるか」、「何において至福は成立するか」は、明確でもなければ、万人に共通してもいない。ある者にとって至福は富であり、富を手に入れば幸せになると信じており、ある者にとっては富の代わりに快樂や名誉が「至福である人間の完全な善」となるのである。

結び. 神認識と人間的行為

先にアキナスは、聖なる教えは「より根源的には人間的行為よりも神的事実がらについて論じるからであり、人間的行為に関しては、それらの行為によって人間が、そこに永遠なる至福が存するところの、神の完全な認識へと秩序づけられるかぎりにおいてである」と言っている。聖なる教えが人間的行為について論ずるのは、人間の「目的であるかぎりの、神に関する認識を伝える」という限定のもとであった。

では、「それらの行為」、すなわちさまざまな人間的行為を繰り返すことによって人間が、「神の完全な認識へと秩序づけられる」とは、どういうことを意味しているのであろうか。『神学大全』第二部で展開されているのは、人間の「神への運動」である。この運動は、一方では人間が自らのほたらきの主として、自らの主権のもとで為される「人間的行為」によって展開される。その一方、この運動は至福への運動であり、もし至福に関する認識が正しければ、「そこに永遠なる至福が存するところの、神の完全な認識へと秩序づけられる」という仕方でも展開される。その意味で永遠への運動にはかならない。

人間による「人間であるかぎりの人間に固有な行為」、「人間がその主であるところの行為」、「考量された意志から発出する行為」が、「そこに永遠なる至福が存するところの、神の完全な認識へと秩序づけられる」ているか否かが、聖なる教えとして問われている。その限りにおいて、人間的行為は単純に時間的な行為と呼ぶことができない。神認識と人間的行為は、このような多元的な場で交差するのではないだろうか。一つ一つの人間的行為が、まさに永遠への運動となるのである。

註

- (1) 稲垣2009, 25頁。
- (2) *S. T. I, q. 1, a. 3, ad 1, sacra doctrina non determinat de Deo et de creaturis ex aequo: sed de Deo principaliter, et de creaturis secundum quod referuntur ad Deum, ut ad principium vel finem. Unde unitas scientiae non impeditur.*
- (3) *S. T. I, q. 1, a. 4, c. Unde licet in scientiis philosophicis alia sit speculativa et alia practica, sacra tamen doctrina comprehendit sub se utramque; sicut et Deus eadem scientia se*

cognoscit, et ea quae facit. Magis tamen est speclativa quam practica: quia principalius agit de rebus divinis quam de actibus humanis; de quibus agit secundum quod per eos ordinatur homo ad perfectam Dei cognitionem, in qua aeterna beatitudo consistit.

- (4) 山田2014, 31頁参照。
- (5) *S. T. I*, q. 2, intro. Quia igitur principalis intentio huius sacrae doctrinae est Dei cognitionem tradere, et non solum secundum quod in se est, sed etiam secundum quod est principium rerum et finis earum, et specialiter rationalis creaturae, ut ex dictis est manifestum (q. 1, a. 7); ad huius doctrinae expositionem intendentes, primo tractabimus de Deo; secundo, de motu rationalis creaturae in Deum; tertio, de Christo, qui, secundum quod homo, via est nobis tendendi in Deum.
- (6) 山田2014, 26-27頁。
- (7) *S. T. I-II*, q. 1, a. 1, c. actionum quae ab homine aguntur, illae solae proprie dicuntur humanae, quae sunt propriae hominis inquantum est homo. Differt autem homo ab aliis irrationalibus creaturis in hoc, quod est suorum actuum dominus. Unde illae solae actiones vocantur proprie humanae, quarum homo est dominus. Est autem homo dominus suorum actuum per rationem et voluntatem: unde et liberum arbitrium esse dicitur facultas voluntatis et rationis. Illae ergo actiones proprie humanae dicuntur, quae ex voluntate deliberata procedunt. Si quae autem aliae actiones homini convenient, possunt dici quidem hominis actiones; sed non proprie humanae, cum non sint hominis inquantum est homo.
- (8) 佐々木2005参照。
- (9) *S. T. I*, q. 2, a. 1, ag. 1 Illa enim nobis dicuntur per se nota, quorum cognitio nobis naturaliter inest, sicut patet de primis principiis. Sed, sicut dicit Damascenus in principio libri sui, omnibus cognitio existendi Deum naturaliter est inserta. Ergo Deum esse est per se notum.
- (10) 佐々木2019, 110-112参照。
- (11) *S. T. I*, q. 2, a. 1, ad 1 Ad primum ergo dicendum quod cognoscere Deum esse in aliquo communi, sub quadam confusione, est nobis naturaliter insertum, inquantum scilicet Deus est hominis beatitudo: homo enim naturaliter desiderat beatitudinem, et quod naturaliter desideratur ab homine, naturaliter cognoscitur ab eodem. Sed hoc non est simpliter cognoscere Deum esse; sicut cognoscere venientem, non est cognoscere Petrum, quamvis sit Petrus veniens: multi enim perfectum hominis bonum, quod est beatitudo, existimant divitias; quidam vero voluptates; quidam autem aliquid aliud.

文献表

- S. T.* Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*, ed. Paulinae, Torino: Commerciale Edizioni Paoline, 1988.

- 稲垣2009 稲垣良典『トマス・アクィナス『神学大全』』, 講談社選書メチエ.
佐々木2005 佐々木亘『トマス・アクィナスの人間論－個としての人間の超越性－』,
知泉書館.
佐々木2019 佐々木亘『トマス・アクィナスにおける法と正義－共同体の可能性をめ
ぐって－』, 教友社.
山田2014 山田晶「註」トマス・アクィナス (山田晶訳)『神学大全 I』(中公クラ
シックW75), 中央公論新社.

本研究は、科学研究費助成事業（科学研究費補助金）基盤研究（B）「統合的経済倫理学に基づくポスト福祉国家レジームの構築：多元的秩序構想の実践的展開（17H02505）」の助成を受けたものです。

